HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	山下, 俊介; 高口, 幸恵
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 35
Issue Date	2017-06-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66398
Type	book
File Information	MuseumNews_35_web.pdf

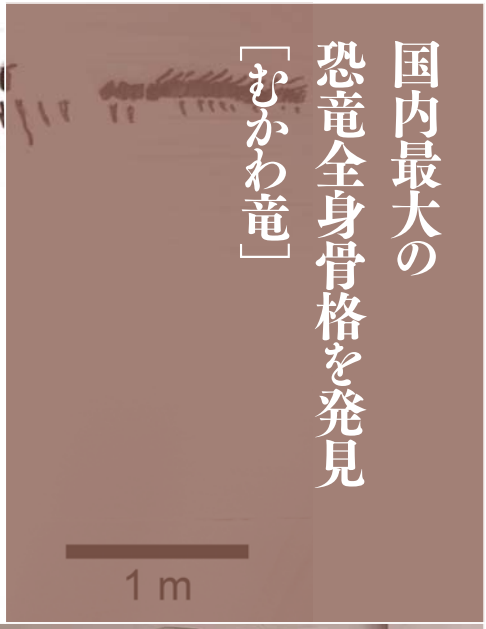
Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

HOKKAIDO UNIVERSITY FOUNDED 1876
ISSN 1345-059X
北海道大学 総合博物館

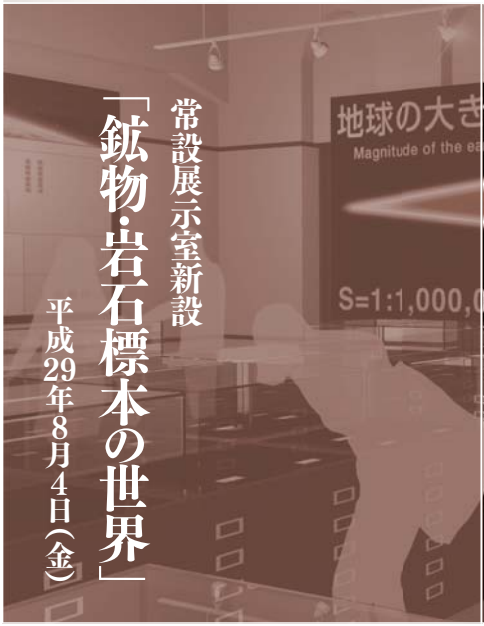
THE HOKKAIDO UNIVERSITY MuseumNews

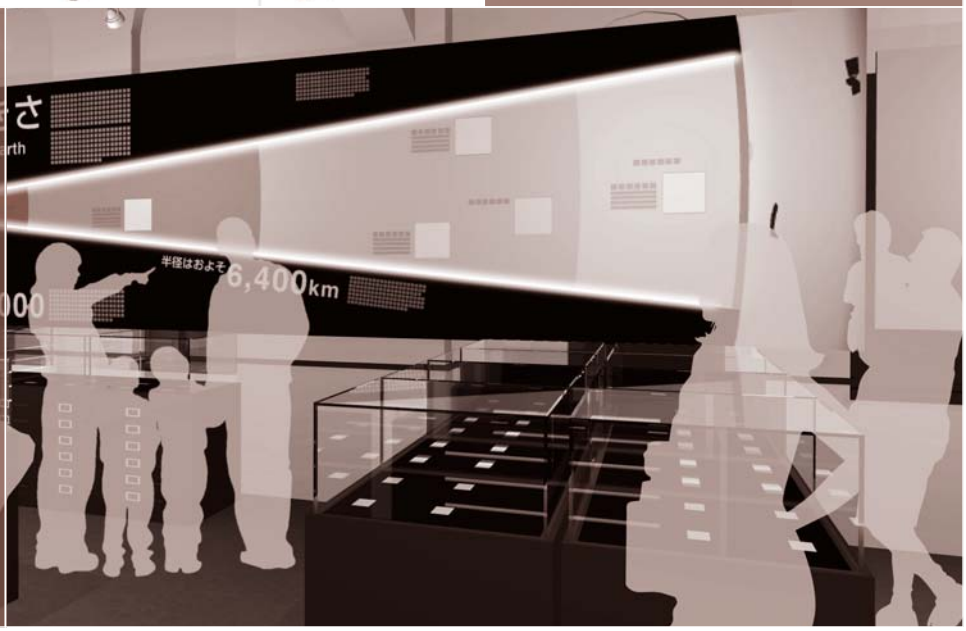
北海道大学総合博物館ニュース

ISSUE 35
June 2017
2017年6月発行



国内最大の恐竜全身骨格を発見［むかわ竜］





常設展示室新設「鉱物・岩石標本の世界」

平成29年8月4日（金）

CONTENTS

01 研究報告
国内最大の恐竜全身骨格を発見（むかわ竜）

04 常設展示室新設 「鉱物・岩石標本の世界」
特別企画 「惑星地球の時空間」

06 常設展示〈収蔵標本の世界〉「古生物標本の世界」

08 卒論ポスター発表会

13 リニューアルオープン後入館者10万人達成

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

研究報告

国内最大の恐竜全身骨格を発見（むかわ竜）

発掘中に確認された大腿骨（真ん中にある横長の大きな石のようなものが大腿骨）［写真提供：むかわ町穂別博物館］

2017年4月28日、当館とむかわ町は、「国内最大の恐竜全身骨格を発見」というプレスリリースを行いました。この恐竜は、むかわ町穂別から発見されたものです。2013年7月に尻尾の骨を確認したと発表し、その後2014年、2015年と発掘を行いました。その結果、日本で最高の恐竜全身骨格化石が発見されたのです。これは、ハドロサウルス科に属す恐竜で、その産地から「むかわ竜」とニックネームが付けられています。

ハドロサウルス科の恐竜は、白亜紀後期（約1億年前から6,600万年前）に棲んでいた恐竜で、どの恐竜よりも植物を食べることを得意としたスーパーベジタリアンの恐竜です。他の植物食恐竜よりもより効率よく餌を多く確保できたため、白亜紀後期の終わりには大繁栄を収め全世界（ユーラシア大陸・北米大陸・南米大陸・南極大陸）に生活域を広げました。ハドロサウルス科の全身骨格化石はそれらの大陸から数多く発見されています。陸上で生活していた恐竜ですが、海の地層からも断片的な化石が発見されています。しかし、海の地層から全身骨格が発見されることは世界的にも稀であり、名前が付いているハドロサウルス科で海の地層から発見されているのは、樺太から発見され昭和11年に北海道大学（旧北海道帝国大学）の長尾巧教授によって命名されたニッポノサウルスのみです。ちなみに、属レベルまで同定されているもので保存のいいものにカナダのプロサウロロフスがあり、未記載標本を加えてもハドロサウルス科全身骨格としては世界で3例目となりました。

恐竜化石は日本全国から発見されていますが、全身骨格というのは非常に稀なことです。全部の骨の50％以上が保存されたものを全身骨格とした場合、これまで全身骨格の発見はニッポノサウルスとフクイヴェナトール（福井県勝山市）のみです。ニッポノサウルスは、発見当時日本国領でしたが、現在はロシア領のため、正確には恐竜の全身骨格化石としてはフクイヴェナートルに次ぐ国内2例目となります。フクイヴェナートルは、白亜紀前期（約1億4,500万年前から1億年前）の手取層群（富山県、石川県、福井県、岐阜県にまたがる陸成層）から発見された獣脚類（肉食恐竜）であり、全長2.5mと小型の恐竜です。

今回のむかわ竜は少なくとも8mあるため、国内最大の全身骨格恐竜化石となります。また、恐竜が最も栄えた白亜紀後期の恐竜としては、全身骨格化石は国内初です。さらに、植物食恐竜としても国内初の全身骨格です。国内から発見されている恐竜化石の多くが陸成層（陸上で堆積した地層）から発見されている中で、1道4県（北海道、岩手県、福島県、兵庫県、香川県）からは海の地層からも恐竜化石が発見されていますが、その全てが断片的なものです。つまり、むかわ竜は海の地層から発見された全身骨格化石として国内初となります。これらからわかるように、むかわ竜は日本の恐竜研究史において最大の発見となりました。

小林快次
（研究部准教授／古生物学）

最初に発見された尻尾の化石［写真提供：むかわ町穂別博物館］

冬季企画展示

「北大古生物学の巨人たち」

●2017年1月31日～ 4月2日

オープニングセレモニーでのテープカット（左から足寄動物化石博物館　澤村寛館長、加藤誠名誉教授、中川館長）

「北大古生物学の巨人たち」は、2017年1月31日から4月2日まで当館1階の企画展示室で開催されました。北大における古生物学の研究は、長い歴史を持っています。理学部地質学鉱物学科地史学・古生物学（のちに層位学）が中心になって研究が盛んに行われています。この講座は、1930年に理学部が創設されたと同時に始まり、初代教授は長尾巧でした。その後、大石三郎（第二代目教授）、早坂一郎（第三代目教授）と引き継がれていきました。これら最初の3代教授は、東北大学の矢部長克教授の教え子だったのです。そして、その後彼らによって、第四代目の湊正雄と第五代目の加藤誠が誕生し、北大古生物学の伝統が引き継がれて行ったのです。初代教授長尾巧からスタートした北大の古生物学。現在もその伝統は受け継がれています。特に近年、恐竜や海生哺乳類を含む脊椎動物化石やベレムナイトなどの無脊椎動物の研究が盛んに行われ、北大古生物が新時代に突入しています。研究対象は国内だけにとどまらず、海外へと広がっています。北大の伝統とも言える「フィールド調査」を基礎にし、次々と新しい化石を発見し新知見を提唱しています。

この「北大古生物学の巨人たち」の展示は、大きく5つのコーナーで構成されました。一つ目は、北大理学部の創設以来の、5人の“巨人”に着目し、彼らが行ってきた研究と扱った化石標本を紹介しました。彼らは、北大の伝統を作り出しただけではなく、貝などの無脊椎動物から恐竜や哺乳類といった大型の脊椎動物まで幅広く研究を行い、日本の古生物学界においても大きく貢献したのです。二つ目は、長尾巧教授が研究し、北大を代表する収蔵品であるニッポノサウルスとデスモスチルスを展示しました。実物標本を並べ、それぞれの実物化石の迫力を実感してもらいました。三つ目は、現在の北大の古生物学の研究を紹介しました。恐竜を始め、クジラや無脊椎動物など多彩な研究がなされている様子を紹介しました。四つ目は、「過去」と「現在」の映像です。「過去」の映像は、長尾教授がデスモスチルスを発掘している貴重な映像です。白黒ですが、作業をしている様子が伺えるものでした。「現在」の映像は、北海道むかわ町穂別の恐竜発掘の映像です。今と昔の映像のコントラストはありますが、発掘の様子は何十年経っても同じであると驚かされます。そして最後は、6年以上北大総合博物館の化石標本の写真を撮り続けたプロの写真家である石崎幹雄氏の写真の数々です。研究者にとって化石は、進化や当時の環境を知るための情報ですが、石崎氏の目を通したアートとしての化石をとらえた写真でした。

また、この展示期間中、ミュージアムマイスターコースの受講生や当館のボランティアによって展示解説が行われました。この活動によって、展示物や解説パネルを超えた情報を来館者に提供することができました。

小林快次
（研究部准教授／古生物学）

第二代目大石三郎教授

2016年度
北大総合博物館活動報告会

●2017年4月3日

発表に聞き入る報告会参加者

総合博物館にて中川館長とボランティア表彰者

水産科学館にて今村館長とボランティア表彰者

2016年度総合博物館活動報告会が2017年4月3日(月)に「知の交流」コーナーにおいて13時半から15時半の予定で開催されました。

中川館長の挨拶に始まり、亡くなられたボランティアの松井洋さん、中野系さん、石橋七朗さん各位への黙とうを捧げた後、5年目表彰として佐藤國男さん、田中公教さん、外山知子さんの各氏に賞状を差し上げました。5年目表彰としての対象者は札幌で14名、函館で1名、10年目表彰の対象者は7名おりましたが、実際にお出で頂けたのはその一部であり残念でした。

土曜市民セミナー等の講演会・講座等は年度を通して31回開催され、2016年5月20日には水産生物標本館の竣工式、7月26日には総合博物館リニューアルオープン、8月5日には企画展示「ランの王国」オープニング等のイベントも行われました。

研究部報告としては、湯浅先生と江田先生に2016年度の活動報告をして頂きました。

資料部研究員報告として秋元資料部長から全体報告を頂いた後、杉山滋郎、木村正人、越前谷宏紀、泉洋江、天野哲也の5名の研究員から活動報告がされました。

総合博物館独自の教育コースであるマイスターコース受講生の和久井彬美さん、森本智郎さんの2名の報告もなされました。

ボランティア報告として、在田ボランティア会長からの全体報告を受け、植物標本(吉中弘介・佐藤広行)、昆虫標本(山本ひとみ)、考古学(田中望羽)、化石(岡野忠雄)、ハンズオン(増田彩乃)、4Dシアター(福澄孝博)といった6件の報告がありました。最後に、中川館長の挨拶を頂き、報告会終了となりました。

本活動報告会により館内の活動を理解し合い、互いの活動への刺激にもなったと思われます。報告会の開催時期や開催時間については意見もありましたので、次回に活かしていきたいと思います。

高橋英樹
(研究部特任教授／植物体系学)

第5回・6回 博物館研究会

●2016年12月2日・13日

博物館研究会を12月2日(第5回)、12月13日(第6回)に総合博物館1階「知の交差点」で開催しました。第5回博物館研究会は「娯楽観光施設の研究と記録化」をテーマに、妙木忍氏(東北大学大学院国際文化研究科)を講師に迎え、秘宝館研究の紹介と研究過程で生み出された記録や収集された資料の保存等について講演とディスカッションが行われました。札幌市定山渓でかつて運営されていた北海道秘宝館等の写真、音声記録等も提示され、札幌市民をはじめとする研究会参加者の関心を惹きつけていました。

第6回博物館研究会は、博物館教育メディア研究系と科学研究費補助金基盤研究(A)(代表者 岡田温司)の共催で、アーティストの南隆雄氏を講師に「アーカイブとコンテクスト:アーティストと映像」をテーマに開催されました。講演では、地中海の地域と時間をテーマに撮影・制作された新作インスタレーション“Midi”の制作意図等の紹介のほか、映像作品の上映も行われました。制作活動を振り返りながら、素材映像やドキュメントのアーカイブ化に関する話題提供があり、映像作品と素材映像、それぞれのコンテクストと両者の関係を問い直す機会になりました。総合博物館1階北階段では、研究会に関連したインスタレーション作品が前日から展示され、来館者や研究会参加者が足を止めて視聴する姿も見られました。

第5回博物館研究会「娯楽観光施設の研究と記録化」

山下俊介
(研究部助教／映像資料学)

常設展示室新設
「鉱物・岩石標本の世界」

●2017年8月4日

特別企画
「惑星地球の時空間」

●2017年8月4日～ 10月1日

当館3階に常設展示室「鉱物・岩石標本の世界」を8月4日(金)に新設します。また、当展示室の新設を記念し、10月1日までの間、探査の動画紹介や展示解説、トークイベントなどを中心とした特別企画「惑星地球の時空間」を実施いたします。当展示室のコンセプトは「地球を感じる展示」です。この展示をご覧になる前と後とで、地球に対する見方がガラッと変わるような展示をめざしています。ここで、その展示の概要をお知らせします。

地球の時空間スケールを一望する試み

私たちの生活に地球内部は無関係な存在でしょうか？　例えば、私たちが常に吸っているこの空気のほとんどは地球内部から流れ出てきたもので、現在も火山噴火を通して大気成分は変わり続けています。また、地球の温暖な気候を支えているのは太陽だけではなく、地熱も重要なはたらきをし続けてきました。しかし、こういった地球内部の潜在的な影響力は私たちの生活環境の時空間スケールの中では見落とされがちです。真に持続発展可能な社会を考えるためには、地球規模の時空間スケールで環境を見つめる機会が必要ではないでしょうか。そこで環境のスケールを感じられる展示を作ることにしました。

環境の大きさや長さはどれくらい？

昨今、環境という言葉がメディアに出ない日はありません。しかし、私たちは環境という言葉の意味をきちんと共有できているでしょうか。例えば、私たちが考える環境とはどのような場所を指すのでしょうか？　また、どのくらいの期間の変動を考えれば良いのでしょうか？　本企画展示では、私たちの生活圏がこの地球とどのような関係にあるのかを明示します。これは、環境が持つ時空間スケールをとらえ直すための足がかりになると思います。

6.4 mの地球断面図

地球の半径はおよそ6400㎞。この地球の大きさを体感できるよう、100万分の1スケール(半径6.4m)の地球断面図を作ります。この断面図の中に富士山を描くとすると、その高さはわずか3.8㎜にしかなりません。飛行機の巡航高度(10㎞)は1㎝。大気圏の最高高度(500㎞)でも50㎝にしかなりません。近年、天気予報や火山噴火予知の精度が格段に向上し、天然の現象はある程度理解できているように錯覚することがあります。しかし、地球内部にはまだ多くの謎が存在し、地震や火山噴火などを通して地球表層の環境を変化させ続けています。それゆえ、地球内部の理解無しで私たちの未来を描くことは不可能でしょう。この断面図を眺めれば、私たちの環境がどのくらいの大きさなのか、また、どのようなバランスの上に成り立っているのか即座に感じることができると思います。

4.6mの46億年地球史年表

46億年におよぶ地球の歴史を4.6mのパネルとして表現します。「大昔」や「太古」という言葉を耳にした時、何年前を思い起こすでしょうか？　このパネルの中で1万年は0.01㎜(髪の毛の太さの1／10程度)にしかなりません。この4.6mのパネルを横目に歩くだけで地球が経験してきた悠久の歴史を体感できるにちがいありません。私たちは、身の周りで地震や火山噴火、台風などが連続して発生すると異常な現象のようにとらえてしまいます。しかし、そのような現象は地球の長い歴史の中ではよくあるできごとなのかもしれません。長い目で過去を振り返ることは、我々の環境に起きた変化が本当に異変であるのかどうかを判断する際の助けになるとともに我々の将来をうらなう上で大事な情報となるでしょう。

当展示室は3階アインシュタインドーム前のN301室およびS301室ですが、「札幌国際芸術祭2017」の関連企画が実施される企画展示室と連携し、夏の宴を盛り上げたいと思います。皆さまのお越しをお待ちいたします。

末尾になりましたが、展示室整備に尽力いただいている展示改訂(地学)ボランティアの皆さま、また、展示室整備のためのクラウドファンディングにご支援いただいた皆さまに熱く御礼申し上げます。

山本順司
(研究部准教授／地球科学)

展示室のイメージ

展示室の現状写真

坂本直行生誕110年記念企画展示

「直行さんのスケッチブック」展

●2016年11月4日～ 2017年1月9日

展示室の様子

坂本直行生誕110年記念企画展示「直行さんのスケッチブック」展が2016年11月4日～2017年1月9日に総合博物館1階企画展示室で開催されました。

2016年は、日高山脈の冬季登山のパイオニアとして、十勝原野で苦闘した農業開拓者として、農民運動家として、また『開墾の記』(1942)、『原野から見た山』(1957)、『雪原の足あと』(1965)などを著した山岳画家として知られる直行さん(なおゆき:「ちょっこうさん」と愛称された)の生誕110年にあたります。それを記念して、前年にご遺族から北大山岳館(北大山の会)に寄贈された直行(ちょっこう)さんのスケッチブック136冊(約2,500点)および木版画56点から120点ほどの作品を選び、それらの道内外・ヒマラヤの山々や山野の草花のスケッチ画、そして若い時代の木版画などを札幌二中～北大時代・十勝原野開拓時代・豊似アトリエ時代・手稲アトリエ時代の4つの時代にわけて展示しました。

直行さんは、蝦夷地開拓を志していたと言われる坂本龍馬(直柔)の甥である坂本直寛(自由民権運動家、キリスト教牧師、訓子府・浦臼の開拓者)の孫にあたります。北大(北海道帝国大学農学実科)在学中は山岳部創立部員として活躍し、卒業(1927年)の3年後に開拓者として南十勝の原野に入植しました。悪戦苦闘の甲斐なく30年にわたる開拓生活に挫折した直行さんは開墾の鍬を絵筆に持ち替え、絵かきとして学生時代そして開拓の合間に登った山々や身近の草花を描き、素朴で暖か味のある素晴らしい作品を残しました。まさに北大のパイオニア精神を具現した人と言えます。

連日ちょっこうファンで賑わい、会期中に行われた佐藤由美加さん(北海道立近代美術館)「山岳画家としての坂本直行」、鮫島惇一郎さん(北大山の会)「直行さんと歩々の会」、前田由紀枝さん(高知県立坂本龍馬記念館)「龍馬と直行」の記念講演会も会場に入りきれない人も出る盛況でした。

在田一則
(ボランティア)

—はじめての人工雪—
誕生80年記念企画
中谷宇吉郎展

●2016年11月8日～ 2017年3月5日

雪博士として広く知られている、故・中谷宇吉郎(北大理学部教授、1962年没)が、北大構内にあった常時低温研究室において世界で始めて“人工雪の結晶”を製作したのは1936年。当展示を開始した2016年はそれから80年の節目にあたります。これを記念して、2016年11月8日から2017年3月5日の雪シーズンに、天然雪と人工雪の研究やこれらの研究がその後に与えた影響を広く知ってもらうために展示を企画しました。

展示を実施した場所は当館3階S301室。本年8月4日に新設する「鉱物・岩石標本の世界」展示室の一部に当たります。この新設展示室では、結晶合成の先駆的研究としてこの人工雪制作も紹介する予定であり、当該企画展示はその設置をお知らせする役割も担っていました。この記事を執筆している4月現在、展示室新設において人工雪制作の意義を再度披露すべく、展示室整備に励んでいます。展示室新設の折にはぜひお越しください。

人工雪の顕微鏡写真

山本順司
(研究部准教授／地球科学)

学術映像上映展示

「北海道×台湾」
@台湾大学博物館

●2016年11月5日～ 12月31日

台湾大学校史館での関連セミナー

国立台湾大学博物館群との共催で、1930年代の北海道帝国大学の学術活動を記録した学術映像の上映展示を台湾大学校史館(台北)で開催しました。上映した映像は『樺太デスモスチルス骨格の発掘』(1933年)、『宮部金吾先生・台湾の旅』(1934-35年)、『祝宮部先生之喜寿』(1936年)の3本で、各映像には背景説明およびシーン説明を字幕で付与し、さらに台湾大学博物館群の関係者・学生と協働し、中国語字幕と短い音楽を加えました。

11月12日には同校史館で関連セミナー “A Documentary Trilogy of Hokkaido Imperial University: From Hokkaido to Formosa”を開催し、呂紹理台湾大学教授が「重曝記憶:宮部金吾與1934年 第10屆日本學術協會」、当館の山下俊介助教が“Real Faces of Japanese Researchers seen in Academic Films in 1930s”の講演を行いました。帝国大時代の北大と台湾大が共有する歴史を改めて認識する機会になるとともに、学術映像の資料としての可能性を確かめる企画になりました。台湾大学で上映した映像は、現在、総合博物館1階北階段前でご覧いただけます。

山下俊介
(研究部助教／映像資料学)

常設展示
収蔵標本の世界

3階常設展示「収蔵標本の世界」では、総合博物館が所蔵する300万点を超える標本の一部を展示しています。前号に引き続き、展示室毎に取り上げ、紹介してまいります。

常設展示

「古生物標本の世界」

「古生物標本の世界」展示室(右が新復元のニッポノサウルス骨格)

◉ニッポノサウルス:新復元骨格展示

ニッポノサウルスは、日本人によって初めて発掘・研究・命名された恐竜です。北海道帝国大学の長尾巧教授によって1934年(昭和9年)に当時日本領だったサハリンから発見され、1936年に命名されました。つまり、北海道大学は日本の恐竜研究の発祥の地であり、ニッポノサウルスは北海道大学が恐竜研究において先駆的な大学であるという象徴なのです。

ニッポノサウルスは、1934年に豊原(現ユジノサハリンスク)の北西30キロにある川上炭鉱(現シネゴルスク)で行われていた病院の建設工事現場に露出する白亜紀後期の地層から発見されました。早速発掘作業が行われ、採集された標本は北海道帝国大学に寄贈され、すぐさまクリーニング作業が行われました。それは、紛れもなく全身骨格化石でしたが、前肢がないことに長尾教授は気づきました。1937年の追加発掘により、四肢骨の大部分を発見し、全身の6割という完成度の高い全身骨格となりました。長尾教授の研究により、この恐竜が、ハドロサウルス科と呼ばれる植物食のグループに属すことがわかりました。

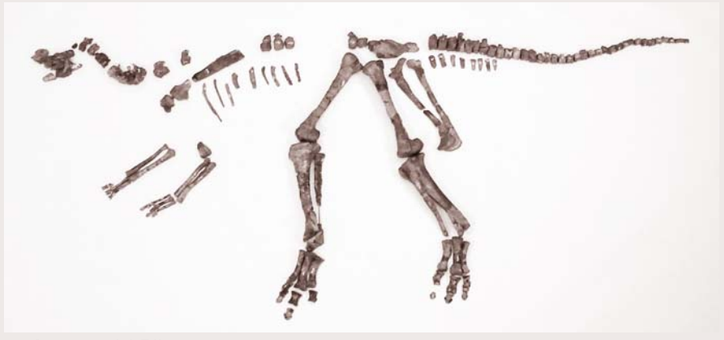
その約70年後に、当時北海道大学の大学院生がニッポノサウルスの再研究を行いました。ニッポノサウルスは、成長しきっていない亜成体で、北米の恐竜に近い恐竜であるという仮説を立てました。そして、今年の5月には、現在の大学院生の高崎竜司さんによって、さらなる研究が行われ、ニッポノサウルスが最低でも3歳であったことと、ニッポノサウルスに近い恐竜はヨーロッパのものであるという新しい説を立てました。このようにして、北大ではニッポノサウルスの研究が受け継がれています。

現在、ニッポノサウルスのタイプ標本は、北海道大学総合博物館に保管されています。展示されている復元骨格は、この実物標本から型取りをして組み立てたものです。以前の復元骨格は、2000年に制作されたもので、全国に3体しか存在していませんでした。北海道大学、国立科学博物館、福井県立恐竜博物館の3つの機関に展示されています。これら全て、福井県立恐竜博物館が建設される時に、この館の監修のもと復元骨格が作られました。

今回、サハリン州郷土博物館が、ニッポノサウルスの復元骨格を展示したいとの要望があり、世界で4体目を制作することになったのです。そのため、当館にあるニッポノサウルスを一度解体し、一つ一つの骨をもう一度型取りして復元し直すという作業を行うことになりました。そこで、この機会に以前の復元で間違っているところを修正し、姿勢を変えたものに作り変えようということになりました。修正した点はいくつもありますが、頭骨では5カ所程度修正しました。クチバシ(前歯骨)や目の周り、頭の上の方など修正をしてより正確な復元骨格に生まれ変わりました。是非博物館に足を運んで、今と昔の違いを見比べてみるというのはいかがでしょうか。

小林快次
(研究部准教授／古生物学)

新しいニッポノサウルスの頭骨



ニッポノサウルスの全身骨格

バリアフリー玄関の完成

写真1 ユニバーサルミュージアムの解説パネル

2016年7月26日にリニューアルオープンを迎えた当館は、より愛される博物館になるため、その展示リニューアルに通底するコンセプトとして「ユニバーサルミュージアム（誰もが利用しやすい博物館）」をめざすことにしました（写真1）。そのためには館内外の徹底したバリアフリー化が必要です。バリアには大きく分けて心理的・物理的の2種類があり、心理的バリアについては、カフェの誘致や入館料無料の継続など、来館しやすい雰囲気を作ることでその低減に努めました。一方、当館の建物は歴史的建造物であるため物理的バリアの低減には工夫が必要です。歴史的な意匠を残しつつバリアフリー化を達成するには、資金や時間の制約もある中でどのような方策が可能か、最善の解を希求する作業を2015年初頭から開始しました。

障がい者福祉の専門家らに実施していただいたバリア調査によると、当館の最も深刻な物理的バリアは、屋外と1階フロアとの間にある約1ｍの段差です。そこで、建物が持つ歴史的な意匠を残しつつこの段差を解消するため、本学の意匠建築の研究者らから助言をいただきつつ、施設部や理学・生命科学事務部営繕担当の方々と協働して編み出した最善の解がこの形です（写真2）。当館の正面玄関横に新設されたこのガラス張りの箱は、約1ｍの段差を解消させるためのエレベーターボックスです。冬季は積雪のため閉鎖していますが、4月から11月末まで当館の玄関として機能します。歴史的な建造物の正面にこのようなガラス張りの箱が存在することに違和感を抱かれる方もいらっしゃると思いますが、建物と似せた新設玄関では建物全体にハリボテ感が出てしまいます。そこであえて近代的に仕上げることで建物全体の価値を守りつつバリアフリー化を達成させることに挑み、このガラス張りの箱ができあがりました。

併設されたウッドデッキも目を引く存在だと思います。ウッドデッキについては次の記事に記しますが、ユニバーサルミュージアムの象徴的な存在として、これからも多くの来館者に当館の気概をお感じいただければと願っています。

末尾ながら、当館のユニバーサルミュージアム化にお力添えいただいた下記の組織や方々にお礼申し上げます。本学の3つのタスクフォース（マスタープラン実現・生態環境・歴史的資産活用）・特別修学支援室・建築史意匠学研究室・札幌市視覚障害者福祉協会・NPO法人「手と手」・北海道新篠津高等養護学校

山本順司
（研究部准教授／地球科学）

写真2 バリアフリー玄関新設．2016年11月4日

ウッドデッキプロジェクト展示

●2017年3月23日～ 4月9日

ウッドデッキプロジェクト展示（バリアフリー玄関とウッドデッキの模型）

バリアフリー玄関が4月1日から再稼働することを祝い、また宣伝するため、2016年に実施した「ウッドデッキプロジェクト」を紹介する展示を行いました。

ユニバーサルミュージアムをめざす当館の活動の一環として、2016年11月4日にバリアフリー玄関が新設されました。しかし、このままでは「博物館の裏口」のような雰囲気が出てしまい、玄関としての機能を発揮できません。そこで、車椅子専用エレベーター利用者を介助される方の動線を確保するとともに、当館の「第2の玄関」としてにぎわいのある居場所を創出することをめざし、ウッドデッキの併設を企画しました。

このプロジェクトには多くの学内外関係者が協働しています。床材には農学研究院の助言を受け、北方生物圏フィールド科学センター中川研究林提供の間伐材のトドマツを使用しました。また、設計は工学研究院の学生が担い、製材や搬送にはOB企業である堀川林業株式会社の協力を得ました。そして本学学生らが自発的に塗装や組み立てに参画して作り上げられたのがこのウッドデッキです。

このように、バリアフリー化への想いを一にする多くの方々に支えられたこのプロジェクトを紹介することで、当館のユニバーサルミュージアムをめざす気持ちをお伝えできたと思います。

展示担当者：
山本順司・山下俊介（総合博物館）
小澤丈夫（工学研究院建築史意匠学研究室）
小泉章夫（農学研究院木材工学研究室）
野村睦（北方生物圏フィールド科学センター中川研究林 林長）

山本順司
（研究部准教授／地球科学）

卒論ポスター発表会

●2017年3月4日・5日

北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、博物館来館者にわかりやすく発表し、質問に受け答えする「卒論ポスター発表会」を2017年3月4日・5日に開催しました。この取り組みは、北大の全人教育の一環として展開しているミュージアムマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目的としています。9回目を迎えた今年度は、リニューアル時に新設された館内の「知の交差点」エリアで開催しました。

発表には下記のように農学部6名、工学部3名、理学部3名、文学部1名、水産学部1名の計14名が参加しました。1枚のポスターを完成させるまでに、当館の担当教職員の指導を受け、他の発表者や運営担当学生とのディスカッションを行う中間発表会に参加し、そこで得た意見を参考にして改訂を重ねました。さらにさまざまな来場者を想定し、それぞれに応じた説明のリハーサルを重ねて準備しました。発表会当日は、緊張しながらも来場者との対話を楽しみながら説明していました。

會澤 拓磨（工学部）
「スイス・チューリッヒ市におけるGestaltungsplanを用いた都市空間デザイン手法の特徴」

熊野 舞香（農学部）
「メチオニンを多量に含む豆類の作出に向けて」

榎枝 竜之介（理学部）
「北海道、滝川単成火山群及び暑寒別火山の岩石学的研究」

佐々木 駿（農学部）
「進化的に保存された植物uORFの機能解析」

林 泰佑（工学部）
「北海道旭川市の都市形成過程」

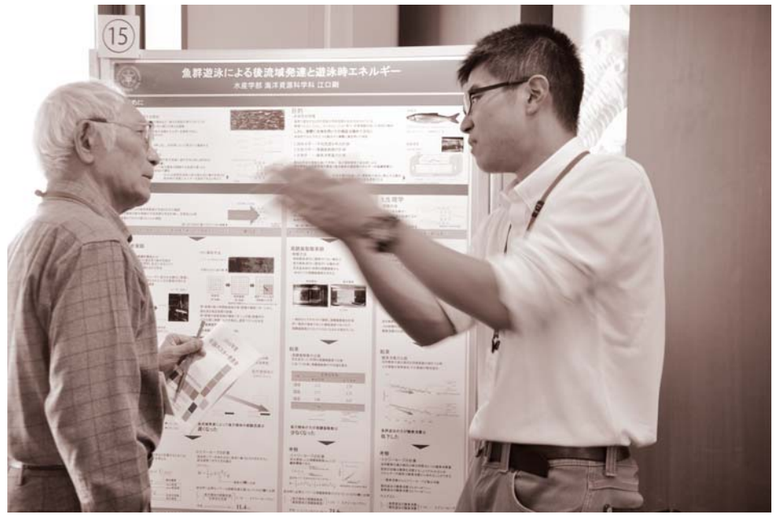
久保 孝太（理学部）
「恐竜類の走行能力適応」

下山 花（農学部）
「機能性食品として注目されるダッタンソバ」

山縣 彩（工学部）
「スイス・バーゼル市におけるBebauungsplänを用いた都市空間デザイン手法の特徴」

山内 洋輔（農学部）
「緩急のあるタンパク質生合成」

佐々木 蓉子（文学部）
「奈良美智作品における人形の意味」



来場者に説明する4年生

松尾 良子（理学部）
「北海道南西部ニセコ火山群、イワオヌプリ火山の形成史と活動年代」

菅野 厚志（農学部）
「北海道固有とされている絶滅危惧植物は本当に北海道固有であるのか」

江口 剛（水産学部）
「魚群遊泳による後流域発達と遊泳時エネルギー」

永森 彩奈（農学部）
「植物の窒素代謝を行うタンパク質複合体の構造と機能をさぐる」

発表会の運営は文学部3年の春名恭太朗さんが担当し、発表者のメッセージなどを掲載したプログラムを制作した他、発表会当日には受付や司会を務め、会をスムーズに運営しました。 発表会の最後には、2日間の来館者の投票による「来館者賞」、市民5名と本学教員5名から成る審査員の評価による「最優秀賞」「優秀コミュニケーション賞」「優秀デザイン賞」を決定しました。「最優秀賞」は水産学部の江口さんが、「来場者賞」は農学部の菅野さんと熊野さんが、「優秀コミュニケーション賞」は農学部の山内さんが、「優秀デザイン賞」は理学部の久保さんと文学部の佐々木さんが受賞し、表彰式と講評会を行いました。

来館者には、さまざまな学部の4年生の研究成果を知っていただく機会となりました。発表者と運営担当学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、卒業研究を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来館者から有意義なご意見をいただく貴重な機会となったことや、発表会を運営した達成感などが綴られています。準備のプロセスや当日の様子、参加した学生の事後考察レポートは当館ホームページで公開しています。
https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/list/12322/

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

会場風景「知の交差点」

2016年度 学生が企画・開発したミュージアムグッズ（1）

右上「Go-to Museum Tote & Badges」（トートバッグ、缶バッジ）
左下「ぱけっとミュージアム」（ハンドタオル）

2017年5月、大学院共通科目「博物館コミュニケーション特論III　ミュージアムグッズの企画・開発・評価」の一環として、11名の大学院生が制作した2シリーズのミュージアムグッズが発売されました。

授業では初めにマーケティング調査を行い、ショップの運営者とも意見交換し、検討を重ねました。その結果、広い年代の方々を対象に総合博物館を身近に感じていただけるよう、総合博物館に関係したデザインで、日常的に使用できるグッズを開発することが決まりました。今回制作したのは、「ぱけっとミュージアム（はかせ・むし・さかな）」（ハンドタオル）と「Go-to Museum Tote & Badges」（トートバッグ・缶バッジ）です。ハンドタオルのデザインは3種類あり、総合博物館の展示室で研究が紹介されている研究者（はかせ）、収蔵庫に保管されている昆虫・魚のタイプ標本をモチーフにしています。また、トートバッグと缶バッジは姉妹品となっており、総合博物館で骨格標本や剥製が収蔵・展示されている動物や、北海道の動植物などをモチーフにし、組み合わせて使うことができます。いずれも学生が執筆して博物館の教員による監修を受けた、グッズについての解説書が付されています。今後はグッズの評価を行っていく予定です。

より完成度の高い物に仕上げたい、という思いから予定していたスケジュールより少し遅れたものの、その分、納得のいくグッズに仕上がりました。ショップで見かけた方は、是非お手にとってみてください。本誌次号では、続いて販売予定の他学生によるグッズをご紹介します。

担当学生： 石井香奈・加藤麻奈（生命科学院）、久保直紀（総合化学院）、坂本一真・田中望羽・手島駿・豊岡この実・増田彩乃（理学院）、白瀧吏菜（農学院）、杉山和香奈（文学研究科）、田中睦乃（医学研究科）
監 修： 江田真毅・大原昌宏・河合俊郎・高橋英樹・山下俊介・山本順司（総合博物館）
撮 影： 藤田良治（高等教育推進機構）
担当教員： 湯浅万紀子（総合博物館）

久保直紀
（総合化学院修士2年）

「北大古生物学の巨人たち」展 学生による展示解説

●2017年1月31日～ 4月2日

「北大古生物学の巨人」展の会期中、ミュージアムマイスターコースの一環として文学研究科修士2年の近藤喜十郎さん、理学部2年の森本智郎さん、総合教育部理系1年の福田祐生さんと私は、ボランティアの方々と共に展示解説を担当いたしました。

私は作夏の「ランの王国」展の時も解説を担当したため、展示解説をすること自体は2回目でしたが、最初の不安はラン展の時よりも大きいものでした。私の専門は植物であり、比較的予備知識があったラン展の時とは異なり、古生物学は殆ど触れたことのない分野だったためです。解説に先立って事前講習を受け、古生物学研究室の大学院生から、展示内容や解説のポイント等を教えていただきました。初めは緊張しましたが、毎回疑問に思ったことや考えたことを湯浅先生にレポートとして提出し、先生から返ってくるコメントやアドバイスを参考に次の解説に臨む、ということを繰り返しました。時には解説をするだけなく聞き手にもなり、来館者の方との会話を重ねていくうちに、毎回の「出会い」が楽しみになっていきました。

展示解説の様子

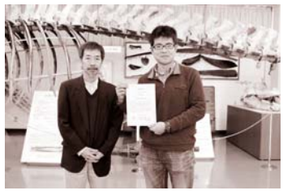
恐竜が大好き、という来館者が多く、その殆どが、私よりもずっと広く深く恐竜についてご存知でした。恐竜や古生物に詳しい方がいらっしゃった時は、無理に解説をせず、聞き手になることを意識しました。聞き手になってみると、多くの方が楽しそうに目を輝かせながら恐竜の話をして下さって、私も自然と引き込まれてしまいました。私は普段「植物が大好き」で研究をしていますが、来館者の「恐竜・古生物が大好き」という気持ちに不思議と親近感がわきました。そして「共感」を得たことで、その方との会話がより楽しく感じられました。

展示室で出会えた一人ひとりの来館者の方との交流が、私にとって大切な思い出です。来館者の方にとっても、展示室での私たちとの交流が、何か思い出として残っていて下さればとても嬉しく思います。

和久井彬実
（環境科学院修士2年）

ミュージアムマイスター認定式

●2017年4月19日・26日



上／今村館長と江口さん（水産科学館クジラ骨格標本前）
下／左から増田さん、中川館長、和久井さん（総合博物館正面玄関前）

総合博物館では、本学が目指す全人教育の一端を担う教育プログラム「ミュージアムマイスター認定コース」を2009年度より展開しています。これまでに30名の学生がミュージアムマイスターに認定されています。

2016年度後期に認定されたのは、水産科学院修士1年江口剛さん（水産学部4年次認定）、理学院修士2年増田彩乃さん、環境科学院修士2年和久井彬実さん（ともに修士1年次認定）の3名です。

江口さんは、今年3月に総合博物館で開催された「卒論ポスター発表会」に函館から参加し、コンテスト形式のこの発表会で見事最優秀賞を受賞しています。認定式は4月19日に函館キャンパスの水産科学館で行われ、同館の今村央館長から認定証が授与されました。

増田さんと和久井さんの認定式は4月26日に総合博物館で行われ、中川光弘館長から認定証が授与されました。増田さんは、「総合博物館は学生を温かく応援してくれる場所なので、これからもいろいろなことに挑戦していきたいです」と、和久井さんは「マイスターコースでは自分の専門だけでは絶対に経験できないことをたくさん経験し、視野が広がりました」とコメントしました。

マイスターコースについての詳細は、総合博物館のウェブサイトをご覧ください。
https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/

西本結美
（研究支援推進員）

2016年度
第1・2回 ボランティア講座＆交流会

●2016年10月28日・2017年3月11日

16グループで活動している240名の博物館ボランティアに、所属グループ以外の博物館活動にも関心を広げたり、相互交流を図っていただくため、博物館ではボランティア講座＆交流会を開催しています。2016年10月には、山本順司准教授と湯浅万紀子教授が博物館リニューアルの趣旨説明と館内見学を行いました。学部展示や感じる展示室、新聞紙の展示の制作に関与されたボランティアからも説明していただき、解説のポイントや展示制作のエピソードを知ることができました。2017年3月には、山下俊介助教に、昨秋2ヶ月滞在された台湾における大学博物館事情を解説していただきました。台湾大学での各種機関の連携や、学生達の活躍の様子が紹介されました。山下助教が現地で企画された学術映像上映についても説明していただき、北大ともゆかりの深い台湾大学の王源名誉教授へのインタビュー映像を上映しながら、研究者のお人柄も伝える映像を両大学で見出して上映会を開催し、情報収集したいとの展望も語られました。

山下俊介助教による講座

湯浅万紀子
（研究部教授／博物館教育学）

総合博物館が主催する大学院共通授業
「博物館学特別講義I：学術標本・資料学」

実物の標本を使った講義

毎年度後期の金曜第5講時（16:30 ～ 18:00）に総合博物館が主担当となって開催される大学院共通授業です。理系・文系を網羅した各種学術標本・資料についての、学内よりすぐりの専門家によるオムニバス授業です。学芸員資格のアドバンスコースという位置づけで、授業ではできるだけ実際の標本やモノを使ったり、お薦めの文献を紹介したりします。内容は、哺乳類・鳥類、昆虫、動物考古学、岩石・鉱物、陸上植物、縄文・アイヌ文化、言語学、海藻、魚類、分子系統進化、昆虫ＤＢ、古生物、民族学、映像・技術史などとなっています。

修士課程院生を主な対象としますが、ミュージマムマイスター認定コースのステップアップ科目にもなっていますので、学部3、4年生で受講している学生もいます。

高橋英樹
（研究部特任教授／植物体系学）

展示＆ワークショップ

藻なんですか？ソウなんです！ ～北海道の植物プランクトンを見てみよう～

●2017年3月18日

身の回りの意外なところにあふれる「藻類」に触れてもらう体験型ワークショップを、北海道大学CoSTEP、日本科学未来館との企画により、3月18日に開催しました。

珪藻類などの植物プランクトンは、光合成により海洋生態系を支える重要な位置を占め、私たちの暮らしに間接的に多大な影響を及ぼしています。石狩湾新港で前日に採集したばかりの生きた植物プランクトンを、手軽なスマホ顕微鏡で観察するコーナーは、親子連れをはじめとする多くの来館者でにぎわいました。

藻類と人類のかかわりに関するミニトーク

CoSTEP修了生により、展示品の解説も行なわれました。絶滅危惧種に指定されている海藻の標本や、国内外の様々な海藻食品、多くの人はそれと知らずに消費している、海藻から抽出された成分が使われている身近な食品類や化粧品、研究が進んでいる「石油を作る藻類」など、実物をまじえての対話により、来館者の興味と理解も深まったようです。のべ約80名の参加者に満足していただけるイベントとなりました。

阿部剛史
（研究部講師／海藻系統分類学）

重要文化財札幌農学校第2農場 ガイド付きショートツアー

●2016年10月25日～ 11月3日

平成28年度の文化財展示公開・活用事業として標記の活動を行いました。期間は平成28年10月25日から11月3日（10月29、30日は休み）とし、午前（10:00～12:00）および午後（13:00～15:00）に、当日申し込みのあった見学者を対象に、第二農場ボランティアグループ7名が2～3名ずつ10～20名を担当してモデルバーン、牝牛舎、穀物庫などをガイドしました。期間中このツアーに参加した見学者は延べ174名（男性91名、女性83名）に及びました。ツアー後のアンケート調査の結果、この催しを知ったのはポスター（28.6％）および北大や博物館のHP（31.7％）によるものが多く、「参加して良かった」、「ガイドの説明は面白かった」、「展示は興味深かった」という感想がほぼ90％を占めました。展示の説明文については「わかりやすかった」が70％程度でした。書き込みでは「ガイドさんの説明があって大変面白かった」と好意的なコメントが大半でしたが、「展示に一工夫ほしい」というコメントもあり、今後の課題となりました。

第二農場ボランティアグループ：
石川満寿夫・石田多香子・稲場良雄・大山圭也・城下洽子・高田和子・寺西辰郎

ガイドツアーのポスター

近藤誠司
（資料部研究員）

北大ミュージアムクラブMouseion 学生による展示解説

●2017年1月21日、3月4・5日

北大ミュージアムクラブMouseionは2011年度の大学院授業「博物館コミュニケーション特論」から発足した、総合博物館を拠点に活動する北海道大学の学生グループです。2016年度は2016年9月に開催されたホームカミングデーに続いて2017年1月と3月に展示解説を行いました。

1月には札幌YMCAの学生ボランティア団体による、小学生のための企画「北大博物館を探検しよう!!」の一部として、次の2名が展示解説しました。内容はやや難しかったかもしれませんが、興味津々に解説を聞いていた子どももいました。

「シロブチヘビゲンゲをめぐって」
杉谷 紬（文学部2年）

「北大昆虫研究の歴史と今」
伊藤 優衣（文学部2年）

3月には、総合博物館で開催された卒論ポスター発表会に合わせて次の3名が解説しました。

「電波望遠鏡を用いた宇宙観測」
吉崎 千真（法学部1年）

ボーダーツーリズムについての展示解説の様子

「時代のタイムカプセル 新聞紙の世界&博物館ボランティア活動の一端紹介」
漆原 まりあ（総合教育部理系1年）

「ボーダーツーリズムってなに？～新しい国境のとらえ方～」
黒岩 杏佳（農学部1年）

解説者3名にとってこの時が展示解説デビューとなりました。どの学生も教員の監修を受けた原稿の推敲、ビデオカメラを用いた練習などを行い、念入りに準備をして本番に臨みました。当日は皆、緊張しましたが、先輩メンバーにサポートしてもらいながら無事に終えることができました。2日間計4回行われた解説に参加して下さった方は多く、興味を持って解説を聞いてくださり、とても良い評価をいただきました。

黒岩杏佳
（農学部2年）

ポプラチェンバロ 10周年コンサート

●2016年10月29日

チェンバリスト水永牧子さんを囲んで

2004年の台風により北大ポプラ並木の老木が多数倒されました。その倒木から製作されたポプラチェンバロは、北大総合博物館に展示され、歴代の担当教員やスタッフ、ボランティアによって大切に維持管理され、国内外の多くの来館者に美しい音色を楽しんで頂いています。昨年10月29日、10周年を記念して製作当時ご尽力頂いた方々により、コンサートと座談会が催されました。

お披露目演奏会もされた水永牧子さんによる洗練された素敵な演奏の後、藤田正一元館長、小俣友輝先生、藤井健志氏、横田誠三氏を交えての座談会では、当時の貴重なお話しが伺えました。その後製作者の横田氏は、丁寧にメンテナンスをして下さいました。耐震工事中も小まめにメンテナンスに努め、リニューアル以後は専用の保管室に設置され、温度湿度の管理も効果的になりました。今後も美しい音を保つよう、皆で気を配って参ります。

石川恵子
（チェンバロボランティア）

レクチャー・コンサート

口琴（ホムス）から広がるサハの世界

●2016年11月6日

口琴の本場サハ共和国の3名の著名な演奏家によるレクチャー・コンサートが北海道民族学会との共催で総合博物館1階「知の交流」ホールを会場に開催されました。サハの口琴は文学部展示でも取り上げられていて、その資料を提供された荏原小百合さん（文学研究科専門研究員・現北海道科学大学准教授）が今回のコーディネータ役を務め、当日も司会と解説を担当しました。演奏の合間にサハの文化が映像やお話で紹介され、また口琴を通してサハとも交流のある川上さやかさんによるムックリの演奏も披露されました。満席の聴衆は、口琴の深い豊かな音色に聴き入るばかりでなく、オフオハイと呼ばれる輪踊りにも参加して、まさに口琴から広がるサハの世界を堪能しました。会終了後には文学部展示室に移動して、口琴ワークショップが行われ、多くの参加者が展示解説を受けながら、口琴の演奏体験や演奏者との交流を楽しみました。演奏者の皆さんも北大総合博物館にこのようなサハ展示やマンモス標本があり、多くの人がサハ文化に関心を示していることに感激していました。

右からK. ボリソフ、S. シシーギン、I. アレクセイエフの各氏、奥は荏原さん

津曲敏郎
（資料部研究員）

第5回 CISEサイエンス・フェスティバル in チ・カ・ホ ～つなげる！ ひと・いきもの・博物館～

●2017年1月21日・22日

シンポジウム「北海道の自然と観光」

北海道大学総合博物館体験ブース

2017年1月21日・22日に札幌駅前通地下歩行空間「北3条広場（西）」にて、第5回CISEサイエンス・フェスティバル in チ・カ・ホを実施しました。

2日間の展示体験会では、札幌周辺の自然史系博物館・動物園・水族館・図書館などの24施設・団体による体験ブースを通し、各施設や団体の活動を知ってもらうことができました。

2016年度は第5回目の開催となり、それを記念して、1日目の1月21日（土）には、「北海道の自然と観光～つなげる！ ひと・いきもの・博物館～」というテーマで、現場実践者・観光企業・行政・研究者によるシンポジウムを実施しました。このシンポジウムは、相互の分野にとらわれず領域を越えて繋がることで、自然を活かした北海道観光の展望が実感できる内容となりました。

また、2日目は、第19回高校生環境学習ポスターセッションの優秀作品発表会を実施しました。北海道の高校生の高いプレゼンテーション能力に、多くの聴衆から高い評価を受けることができました。他には、北海道新聞野生生物基金が実施する「北海道フラワーソン2017年の役割」や「ぜったい楽しいコウモリのお話」のステージショーを実施しました。

菊田　融
（資料部研究員）

宇宙の4Dシアター

●2016年12月18日・
2017年4月9日

4月9日の4Dシアター公演

総合博物館人気の体験型展示プログラム「宇宙の4Dシアター」を、12月18日と4月9日に開催しました。12月18日は「想像する火星」を筆者が、「宇宙人ってホントにいるのかな?」を4Dボランティアの福澄孝博氏が提供する2本立てプログラムで午後に2回開催し、4月9日は福澄孝博氏をナビゲータに「天の川の中、天の川の外」と題したプログラムで午前1回、午後2回の3回公演を行いました。両日とも整理券を求める来場者の列ができ、各回とも満員の盛況な公演となりました。

フライヤーの制作、受付、司会など公演運営の全ては当館4Dシアター運営ボランティアによって行われており、来場者にむけた体験プログラムをボランティアメンバーが工夫しながら息長く提供し続けているという、特徴ある運営体制をとっています。6月公演、7月のカルチャーナイトでの公演も予定しています。多くの方のご来場とボランティアへの参加をお待ちしています。

山下俊介
（研究部助教／映像資料学）

リニューアルオープン後入館者10万人達成

●2016年11月16日

中川館長と経済学部の進藤さん（中央）、山口さん（右）

当館は7月のリニューアルオープン以降、わずか3ヶ月半程の11月16日に入館者数が早くも10万人に達成しました。

10万人目の入館者となったのは、経済学部3年の進藤匠さんです。館内カフェでの昼食を兼ねて友人の同学部3年の山口峻正さんと来館されました。記念セレモニーでは、中川光弘館長よりリニューアルオープン後入館者10万人目証明書と、博物館のある1929（昭和4）年竣工の理学部本館建物から耐震改修工事で剥がされた歴史ある外壁タイルを使用した記念品、ミュージアムグッズを贈呈しました。進藤さんは「学部紹介展示は、高校生の頃に見学していたら進路選択にとても役立てられたと思う。今、実際に学んでいる経済学部の展示からも、新たな発見ができました。」「体験型の展示が興味深いので、もっと増えて欲しい。」と感想を話してくださいました。

（事務室）

平成28年度後期記録

平成28年10月から平成29年3月までに行われたセミナー・シンポジウム

バイオミメティクス市民セミナー
「サメの多様性と生存戦略」
佐藤 圭一
（沖縄美ら島財団総合研究センター 動物研究室 室長）
日時：10月1日(土) 13:30～15:30
参加者：78名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「骨を作る細胞と食べる細胞の不思議を探る」
網塚 憲生（北海道大学大学院歯学研究科 教授）
日時：10月8日(土) 13:30～15:00
参加者：58名

第4回ミュージアム・カフェ
金曜ナイト・セミナー
「おとなの夜の恐竜学」
小林 快次（北海道大学総合博物館 准教授）
日時：10月14日(金) 19:00～20:00
参加者：48名

第5回ミュージアム・カフェ
金曜ナイト・セミナー
「日本海は進化のゆりかご―海藻と貝形虫―」
阿部 剛史（北海道大学総合博物館 講師）
日時：10月28日(金) 19:00～20:00
参加者：34名

バイオミメティクス市民セミナー
「糸の匠、すごもりはだに」
齋藤 裕（北海道大学 名誉教授）
日時：11月5日(土) 13:30～15:30
参加者：45名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「子どもの貧困から公正な社会を考える」
松本 伊智朗
（北海道大学大学院教育学研究院 教授）
日時：11月12日(土) 13:30～15:00
参加者：70名

坂本直行生誕110年記念企画展示
「直行さんのスケッチブック」展 記念講演会
「山岳画家としての坂本直行」
佐藤 由美加（北海道立近代美術館 主任学芸員）
日時：11月19日(土) 13:30～15:00
参加者：120名

坂本直行生誕110年記念企画展示
「直行さんのスケッチブック」展 記念講演会
「直行さんと歩々の会」
鮫島 惇一郎（北大山の会）
日時：11月20日(日) 13:30～15:00
参加者：145名

坂本直行生誕110年記念企画展示
「直行さんのスケッチブック」展 記念講演会
「直行さんのスケッチブック」展 記念講演会
「龍馬と直行」
前田 由紀枝
（高知県立坂本龍馬記念館 学芸課長）
日時：11月27日(日) 13:30～15:00
参加者：156名

第5回博物館研究会：公開研究会
「娯楽観光施設の研究と記録化」
妙木 忍
（東北大学大学院国際文化研究科 准教授）
日時：12月2日(金) 15:00～16:30
参加者：20名

バイオミメティクス市民セミナー
「樹木細胞壁の形成過程を模倣したもの作り」
浦木 康光（北海道大学大学院農学研究院 教授）
日時：12月3日(土) 13:30～15:30
参加者：67名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「玉手箱が明らかにする宇宙と生命の謎」
臼本 尚義（北海道大学大学院理学研究院 教授）
日時：12月10日(土) 13:30～15:00
参加者：75名

第6回博物館研究会：公開研究会
「アーカイブとコンテクスト：アーティストと映像」
南 隆雄（アーティスト）
日時：12月13日(火) 16:50～19:00
参加者：13名

バイオミメティクス市民セミナー
「サケ―謎に満ちた生命の旅」
菊池 基弘（サケのふるさと千歳水族館 館長）
日時：1月7日(土) 13:30～15:30
参加者：67名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「コミュニティによるローカルなお金は可能か？
―北海道仮想地域通貨 DOに向けて―」
西部 忠（北海道大学大学院経済学研究科 教授）
日時：1月21日(土) 13:30～15:00
参加者：44名

バイオミメティクス市民セミナー
「昆虫の学習と微小脳：
ヒトの脳のしくみとは違うのか?」
水波 誠（北海道大学大学院生命科学院 教授）
日時：2月4日(土) 13:30～15:30
参加者：72名

冬季企画展示
「北大古生物学の巨人たち」関連セミナー
「触覚と写真 ―光の化石―」
石崎 幹男（写真家）
日時：2月5日(日) 13:30～15:00
参加者：46名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「はじけるダイズ
―収穫量を増やす莢の仕組み―」
藤野 介延（北海道大学大学院農学研究院 准教授）
日時：2月11日(土・祝) 13:30～15:00
参加者：43名

冬季企画展示
「北大古生物学の巨人たち」関連セミナー
「北大化石標本コレクションの系譜」
越前谷 宏紀
（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：2月12日(日) 13:30～15:00
参加者：33名

冬季企画展示
「北大古生物学の巨人たち」関連セミナー
「ニッポノサウルスの最新研究」
高崎 竜司（北海道大学大学院理学院博士課程）
日時：2月19日(日) 13:30～15:00
参加者：41名

バイオミメティクス市民セミナー
「ダニの話：形態,生態,多様性」
高久 元（北海道教育大学教育学部札幌校 教授）
日時：3月4日(土) 13:30～15:30
参加者：52名

冬季企画展示
「北大古生物学の巨人たち」関連セミナー
「デスモスチルスの発見、発掘と研究」
田中 嘉寛（沼田町化石館学芸員・
北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：3月5日(日) 13:30～15:00
参加者：50名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「外来種対策の現状と課題
―アライグマ対策を中心に―」
池田 透（北海道大学大学院文学研究科 教授）
日時：3月11日(土) 13:30～15:00
参加者：59名

冬季企画展示
「北大古生物学の巨人たち」関連セミナー
「私と化石 ―DNAから進化を探る―」
大石 道夫（かずさDNA研究所 理事長）
日時：3月30日(木) 15:00～
参加者：60名

平成28年10月から平成29年3月までに行われたパラタクソノミスト養成講座

野外採集・地質見学会
松枝 大治（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：10月8日(土)～9日(日) 定員：20名
対象：中学生以上（参加者23名）

きのこパラタクソノミスト養成講座（初級）
小林 孝人（北海道大学総合博物館 資料部研究員）
日時：10月15日(土) 定員：10名
対象：中学生以上（参加者10名）

平成28年10月から平成29年3月までの主な出来事

10月7日 ミュージアム・カフェ ナイトコンサート～ヴィヴァルディ四季 弦楽四重奏～ 開催
10月8日 学術研究員 泉 洋江さん 着任
10月21日 ミュージアム・カフェ ナイトコンサート～秋の夜長にポプラチェンバロを囲んで～ 開催
10月24日 東海大学札幌キャンパス博物館実習（16名）解説
10月25日 札幌農学校第2農場ガイドツアー開催（～ 11/3）
10月26日 大韓民国政府関連職員一行（15名）解説
10月29日 ポプラチェンバロ10周年記念トーク＆コンサート 開催
11月1日 文部科学省大臣官房人事課長一行（4名）解説
11月4日 坂本直行生誕110年記念企画展示「直行さんのスケッチブック」展 開催（～ 1/9）
11月6日 レクチャー＆コンサート ホムス（口琴）から広がるサハの世界 開催
11月8日 ―はじめての人工雪― 誕生80年記念企画 中谷宇吉郎展 開催（～3/5）
11月16日 マッコーリー大学（オーストラリア）工学部長一行（5名）解説
11月17日 東海大学札幌キャンパス博物館実習（15名）解説
12月1日 文部科学省高等教育局国際戦略分析官（1名）解説
12月18日 宇宙の4Dシアター 開催
1月20日 文部科学省研究振興課長一行（2名）解説
1月22日 New Year Concert 開催
1月31日 冬季企画展示「北大古生物学の巨人たち」 開催（～ 4/2）
2月8日 ポーランド日本美術技術博物館"マンガ"館副館長一行（4名）解説
2月23日 ロシア連邦サハ共和国「アジア子供スポーツ大会国際員会」会長一行（7名）解説
2月24日 放送大学北海道・東北ブロック所長会議出席者一行（12名）解説
3月3日 文部科学省国立大学法人支援課係長ほか一行（8名）解説
3月14日 華東理工大学学長一行（8名）解説
3月18日 展示＆ワークショップ 藻なんですか？ソウなんです！ ～北海道の植物プランクトンを見てみよう～ 開催
3月20日 春のヴィオラ・コンサート 大バッハとその息子たち 開催
3月23日 ウッドデッキプロジェクト ―自分たちのキャンパスは、自分たちでつくれる―展示 開催（～ 4/9）
3月31日 学術研究員 泉 洋江 さん
学術研究員 菊田 融 さん
事務補佐員 福田 美波 さん
退職

入館者数（平成28年10月～平成29年3月）

	入館者数	見学団体数	解説の件数	企画展示（略称）
10月	24,089	43	14	
11月	18,592	27	9	「直行さんのスケッチブック」展（11/4 ～ 1/9） 中谷宇吉郎展（11/8 ～ 3/5）
12月	9,879	8	3	「直行さんのスケッチブック」展（11/4 ～ 1/9） 中谷宇吉郎展（11/8 ～ 3/5）
1月	9,328	6	2	「直行さんのスケッチブック」展（11/4 ～ 1/9） 中谷宇吉郎展（11/8 ～ 3/5） 北大古生物学の巨人たち（1/31 ～ 4/2）
2月	10,908	17	3	中谷宇吉郎展（11/8 ～ 3/5） 北大古生物学の巨人たち（1/31 ～ 4/2）
3月	12,109	8	6	中谷宇吉郎展（11/8 ～ 3/5） 北大古生物学の巨人たち（1/31 ～ 4/2）

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。
（平成28年10月1日～平成29年3月31日）

（敬称略）

◉植物標本
阿部桂子, 蝦名順子, 大原和広, 小笠原 誠, 加藤康子, 桂田泰惠, 加藤典明, 金上由紀, 児玉 諭, 駒谷久子, 嶋崎太郎, 須田 節, 髙橋美智子, 徳原和子, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音治, 本多丘人, 村上麻季, 目黒嘉子, 吉中弘介, 與那覇モト子, 和久井彬実

◉菌類標本
石田多香子, 齋藤美智子, 鈴木順子, 高田和子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

◉昆虫標本
青山慎一, 秋元優希, 伊藤優衣, 梅田邦子, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤諒一, 志津木眞理子, 髙品裕太, 高橋誠一, 髙栁達志, 竹本拓矢, 問田高宏, 鳥山麻央, 中西茂弘, 永山 修, 伴 光哲, 古田未央, 牧田 習, 松本千春, 松本侑三, 村田真樹子, 村山茂樹, 山本ひとみ, 吉岡秀晟, 芳田琢磨

◉考古学
青木大輔, 浅尾佳里, 安 翔宇, 五十嵐大将, 石場ゆり, 稲田 薫, 岩波 連, 江口暁彦, 翁 哲毅, 大泰司紀之, 奥山杏南, 神田いずみ, 木内和秀, 木村則子, 熊倉大騎, 黒田充樹, 斉藤理恵子, 榊山匠, 佐々木征一, 佐藤美恵, 末永義圓, 鈴木 諒, 隅田悠花, 武石にれ, 田中公教, 田中望羽, ツォグトバーター チンゾリグ, 中井勇海, 長瀬のぞみ, 中野 系, 成田千恵子, 西本結美, 二瓶寿信, 林 礼斗, 林 和花奈, 東田有希, 平尾嵩志, 平野このみ, 水澤こと, 宮崎真結, 森本智郎

◉メディア
飯島正也, 伊藤優衣, 織田さやか, 卓 彦伶, 三嶋渉, 孟 洋洋, 山本ひとみ

◉化石
朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 池上森, 石崎幹男, 石橋七朗, 池田雅志, 市橋晃弥, 伊藤麻衣, 今井久益, 臼田みゆき, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 尾上洋子, 加藤利佳, 金内寿美, 上川 伶, 川又いづみ, 木村聖子, 木村映陽, 木村衛朋, 久保孝太, 久保田 彩, 近藤知子, 近藤弘子, 酒井実, 榊山 匠, 佐藤美恵, 鈴木 諒, 高崎竜司, 高田健太郎, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, ツォグトバーター チンゾリグ, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 時永万音, 冨野淳子, 内藤美穂子, 中井勇海, 長瀬のぞみ, 長野あかね, 中野 系, 中谷内 奎, 那須遥香, 八丁目清之, 八丁目文枝, 福田祐生, 古井 空, 堀 睦, 前田大智, 森 淑子, 山下暁子, 吉田純輝

◉北大の歴史展示
寺西辰郎

◉展示解説
在田一則, 石橋七朗, 飯島正也, 石黒弘子, 生越昭裕, 河本恵子, 菅 妙子, 児玉 諭, 堺 俊樹, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 田中公教, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, 中野 系, 成田敦史, 西川笙子, 沼崎麻子, 濱市宗一, 増田彩乃, 松田義章, 村上龍子, 孟 洋洋, 森 淑子, 山崎敏晴, ロバート・クルツ

◉翻訳
上川 伶, ロバート・クルツ

◉平成遠友夜学校
大山圭也, 柿本恵美, 上川 伶, 佐伯圭一郎, 城下洽子, 田中敏夫, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 増田文子, 松田大徳, 山岸博子

◉4Dシアター
清谷優理香, 後藤凌平, 関上 遼, 田中裕子, 塚田則生, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子

◉ポプラチェンバロ
浅川広子, 石川惠子, 小野敏史, 清水聡子, 新林俊哉, 髙橋芙悠, 中村会子, 新妻美紀, 野中敏明, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子, 横倉伶奈

◉図書
岡西滋子, 児玉 諭, 今野成捷, 齋藤美智子, 須藤和子, 髙木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮒田久意, 星野フサ, 本名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 安田 正, 山岸博子

◉第二農場
石田多香子, 大山圭也, 稲場良雄, 城下洽子, 高井宗宏, 高田和子, 寺西辰郎

◉ハンズオン
加藤典明, 久保直紀, 今 布咲子, 嶋野月江, 下川千尋, 鈴木理花子, 須藤和子, 沼崎麻子, 福澄孝博, 古田未央, 増田彩乃, 山岸博子

◉展示改訂（地学）
在田一則, 佐藤健一, 佐藤 豪, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三嶋 渉, 横倉伶奈

◉きたみてガーデン
芦澤万里音, 阿部 悠, 伊藤響子, 今井琴雅, 上野綾, 海老名光希, 大塚美咲, 大原萌未, 小森安奈, 近藤 縁, 城間拓也, 玉田聖司, 濱尾瞳子, 古舘匠, 星野愛花里, 堀川さゆみ, 水谷吏絵, 松下周平, 谷中英明

◉水産科学館
櫻井慎大, 佐々木嘉子, 亢 世華, 菊地 優, 井口詩織, 川畑 達, 木村克也, 高岸愛実, 田中友樹, 中原隆史, 川原田峻平, 寺塚真奈美, 外山太一郎, 岸本早貴, 木村まい, 宍戸太郎, 高橋雄大, 圓谷千夏, 武藤岳人, 屋敷遙香, 小林奈緒

◉企画展示「北大古生物学の巨人たち」展示解説
川又いづみ, 笹谷幸恵, 佐藤國男, 高田和子, 塚田則生, 寺西辰郎, 問田高宏, 永山 修, 野村さおり, 濱市宗一, 福田祐生, 増田彩乃, 村上龍子, 森本智郎, 和久井彬実

［表紙写真］ 上：むかわ竜全身骨格［写真提供：むかわ町穂別博物館］ 下：「鉱物・岩石標本の世界」展示室（完成予想図）

THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM
北海道大学総合博物館

北海道大学総合博物館ニュース 第35号
編　集：山下俊介・高口幸恵
発行日：2017年（平成29年）6月26日
発行者：中川光弘

発行所：北海道大学総合博物館
所在地：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
E-mail：museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/

デザイン・印刷
畠山尚デザイン制作室